



岡本勘造綴



夜嵐阿衣花廻仇夢号二

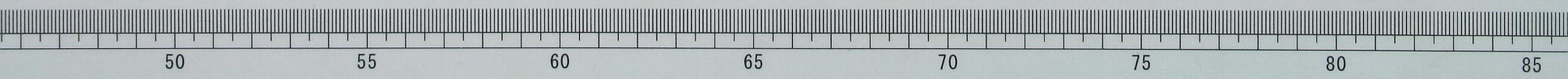
永島孟齋画



芳川俊雄閱

川

三





秋あじ

おきぬ

花経

芳川 俊雄 関

園 李 藝 造 繕

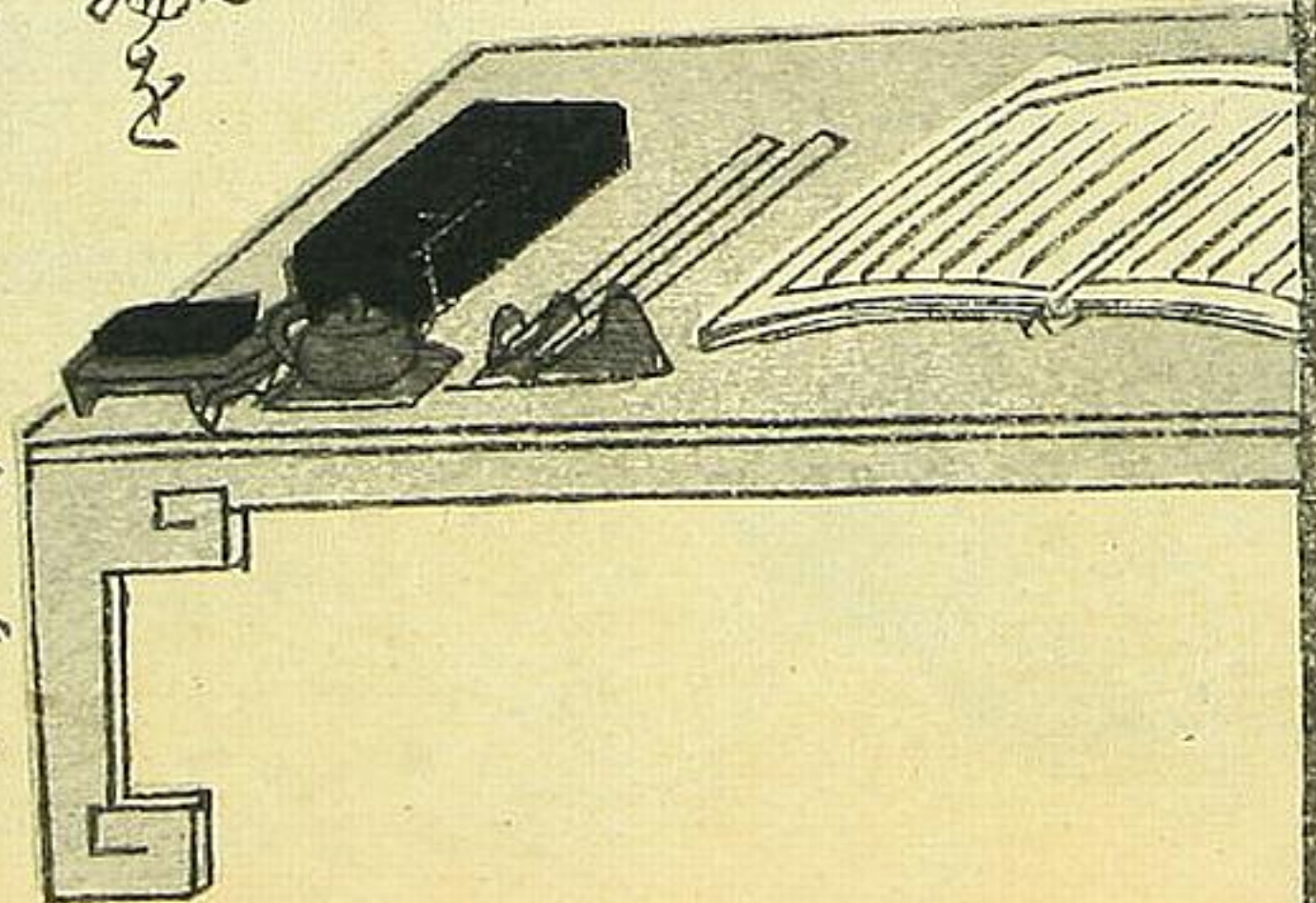
仇 夢 二 編

金松堂 梓



子 雲 堂 画

花見小袖は色さ(疾うろろひく今ぞ
此の思ひ宿るはるん秋津花に
あつてよ夜のやれり 駈をのせよと
いされぬ遊草まよすお襦もそぐじし
あな一身に面有き案帳のうたふし
川らし乃は附苔を便とてぬく初篇を
綴りしに使保も後をとの傳あはせし
手編をつぎあてひきまらた手之のねるは仕事に
まこポツとと流るう中



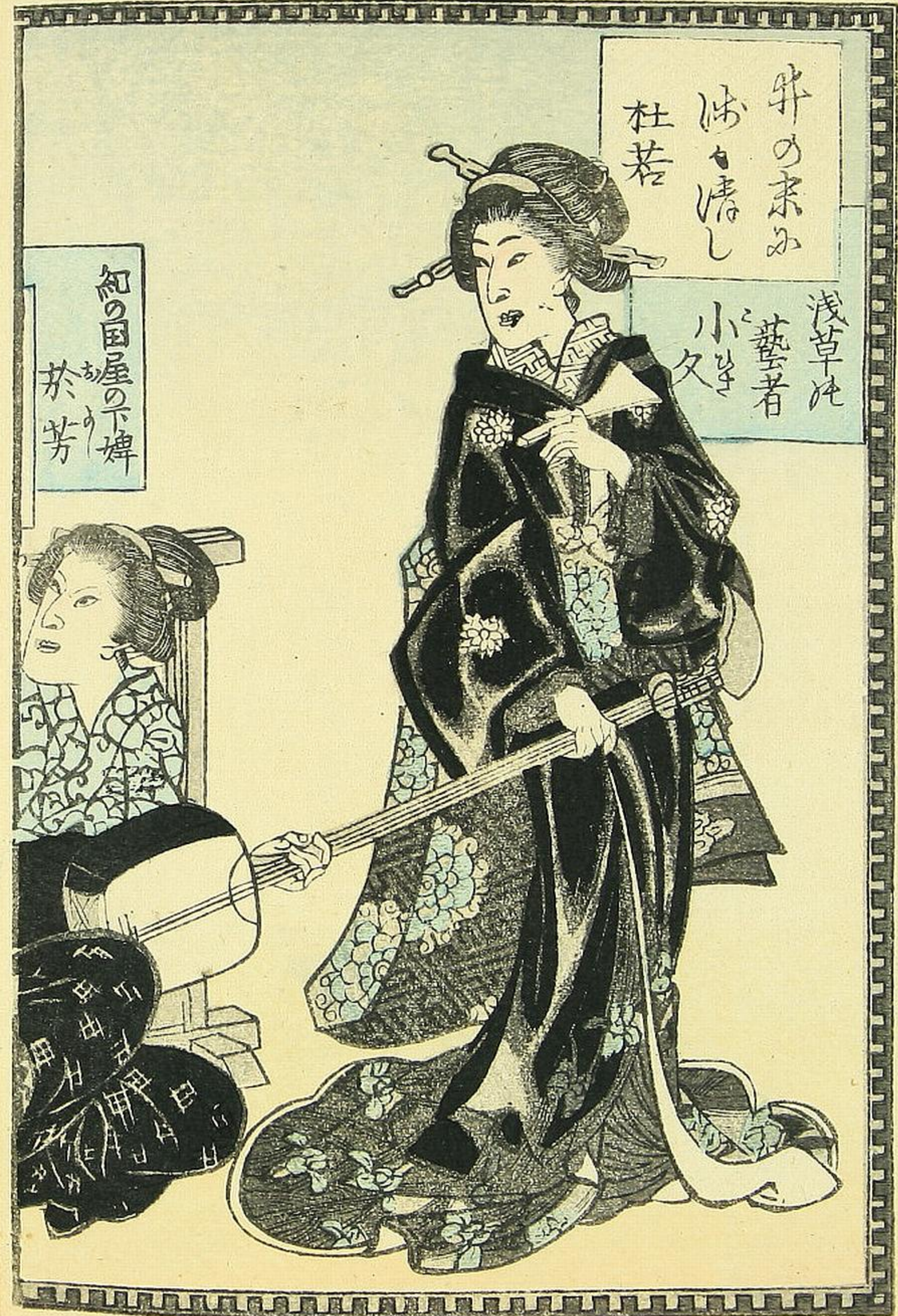
明治十一年七月ら渡

星本島造題



井の末み
水々清し
杜若

浅草流
藝者
小文



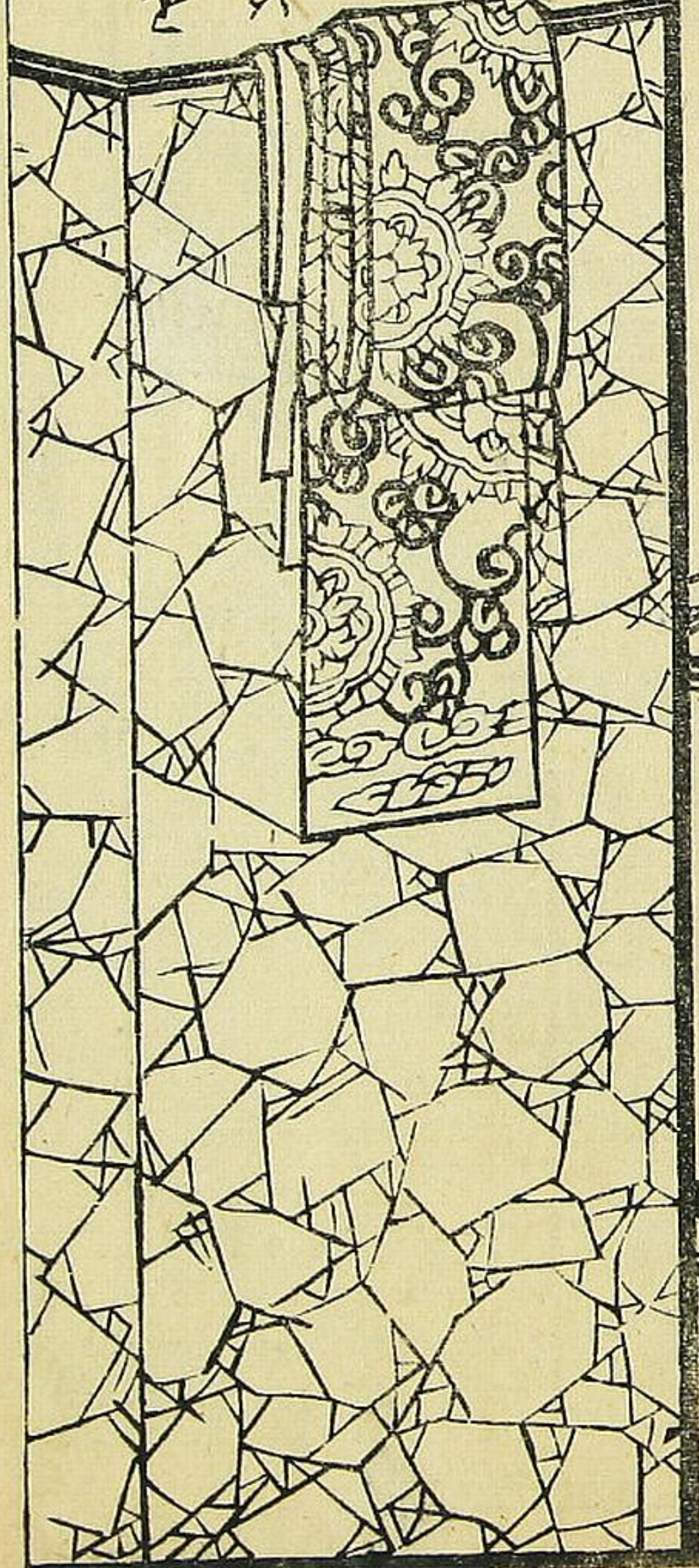
細の国屋の下婢
於芳

救の
かせ
鏡の上
とまり危
あきぬ侍女
於小夜

宿の
面
郭公



撥 扱も角太郎の思ふもあまが相手に
 夜の更るす心酒の酔ふれたる其死へ
 打卧しまだ起らせぬ其翌朝宅小唄守せし婢女が
 いと慌てて取次やち八重さあめ昨夜の内
 とくさうあのでるこれのさう雨戸が一枚外
 れさす縁のあたりぬ泥の足跡つたつた
 常事とぞ思われ
 ぬの早うお帰り
 下されとのみ後
 聞ゆる角太郎
 昨夜の酒ままだ醒めぬ
 是れは公重が事を
 こゝろ早く下



正 歸つてこれら事あふんと兎や角な
 しく清々と宅へ戻れはひい違ひ
 庭の切戸が破れあり曲者入し様子
 正



猿若所の俳優
 嵐璃鶴

送りの者
 源井伊三郎

お八重がわかれの舞の
 訝は夜半に何処へ行
 べきを扱ひ此身がまき
 ぬの許へ通路まげまき
 恨みと思ひ使ひあは
 身はいとまゝ不胸の
 せやうそ若ひよると
 悪の覚悟をあらせぬ
 う何の心せよ不思議
 心とお八重の臥床を
 調へてあつらひに
 落たる冬の切
 端これいと取あ



其様の事のあらざる様
 りあられと現在男の此手
 紙の心せく
 取
 落せ
 小相
 違ふ

げさく見れば
 男の手跡を始めはるけ
 れど此程申し
 あげし通う今宵
 こぞ首尾しつゝあはれ
 合つておれ
 あまほ申せし通うあはれ
 必らずとも人に曉られぬ様を支
 度るはれおまづり用事のみ
 取のそだあつとこと筆のとめてお
 留らぬ此道たう
 りこのみゆめ
 お八重に限つて

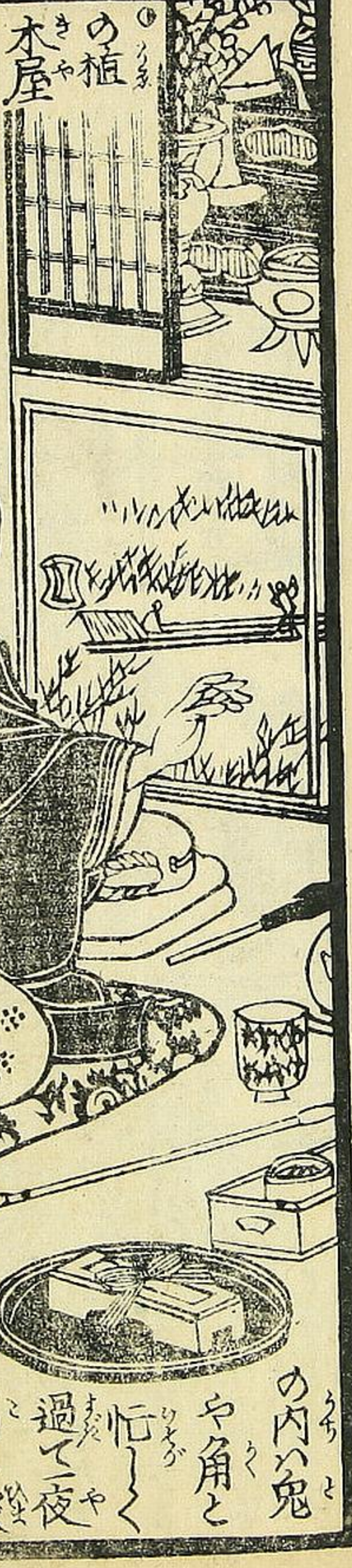


ア七人の子
 りまゝと古人がり
 思ひ憎き女あつらふ其を伴出せ
 男の誰を外お近うせし者として
 入らぬれと折々出入
 下水
 次勇の
 郎のみ其あはれ
 打と不意に氣を男お八重も常にやがり
 あれかよらや彼もあはれど誰であらうと
 手跡を眺め免れまかると思案にあはれ

おたじろ元より心廣き性なれど
深くの胸を痛め終る面白
かゝ終り下たつひつひ酒を
湯豆腐肉にて度ざるがめて獨酌の野へ
隣のをきぬるお八重が家出の見舞として
お小夜を使ひませへ座敷へ通て始終を
語り証據の多を見せけるお小夜の撲と
手と拍と是下あつ此中々度々見つけた
小意氣の男と門辺にてお八重とんが
ひるくを私
やお出入



お芳の去年の師走より本町の
本宅へ用事の
はひみ帰
りじが
お八重の
事
心
程遠
らお本
石町の
松坂屋の
様子を探ら
んと思ひ夕暮

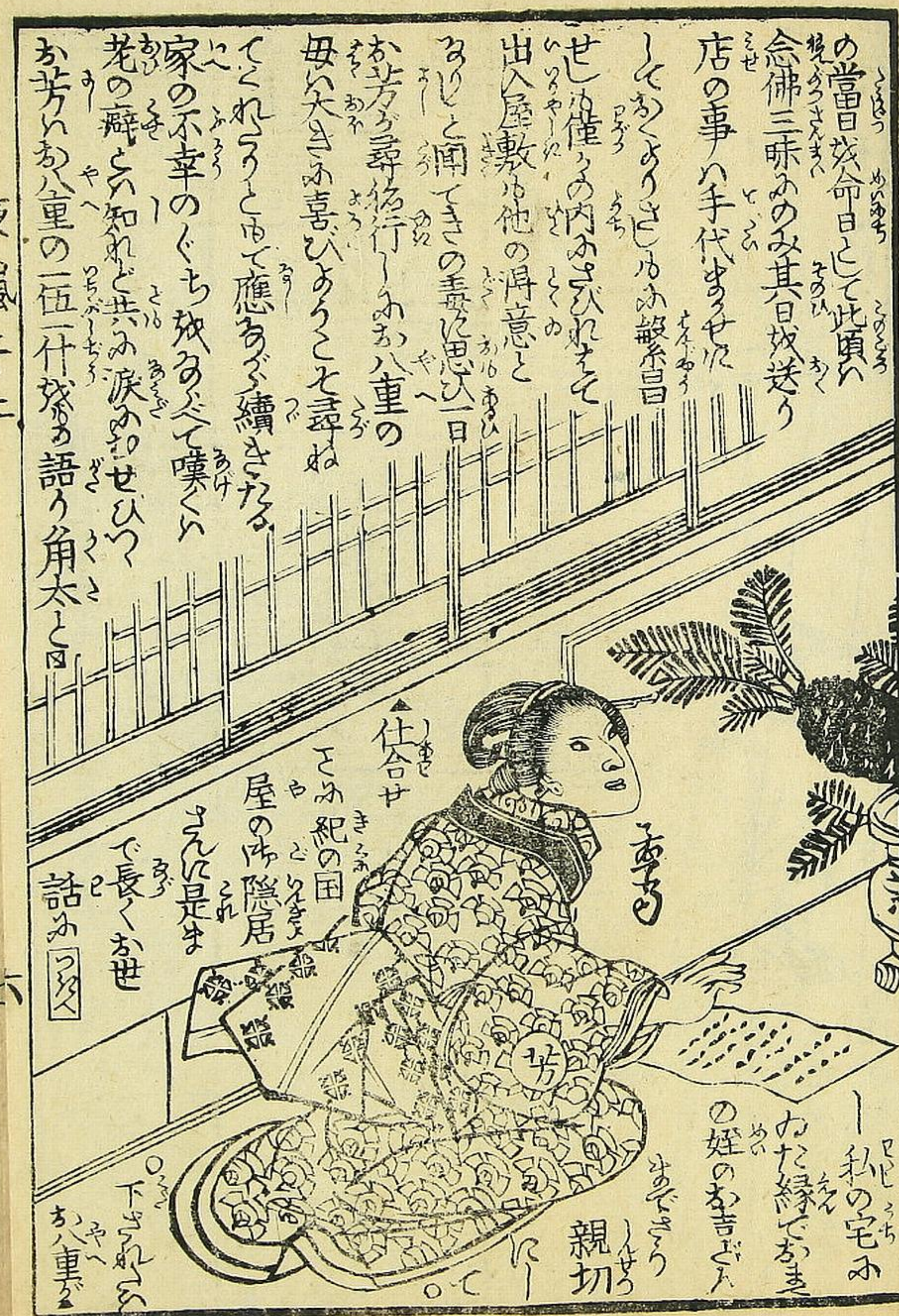


の植
木屋
の内の鬼
や角と
忙
過て一夜
を越し暇
あるはひみ近野へ
出うけ様子を聞
が松坂屋の主人
弥兵衛の大酒
つお内損の病成
起し去年の十月
此世を去りお八重
の母の二度までル



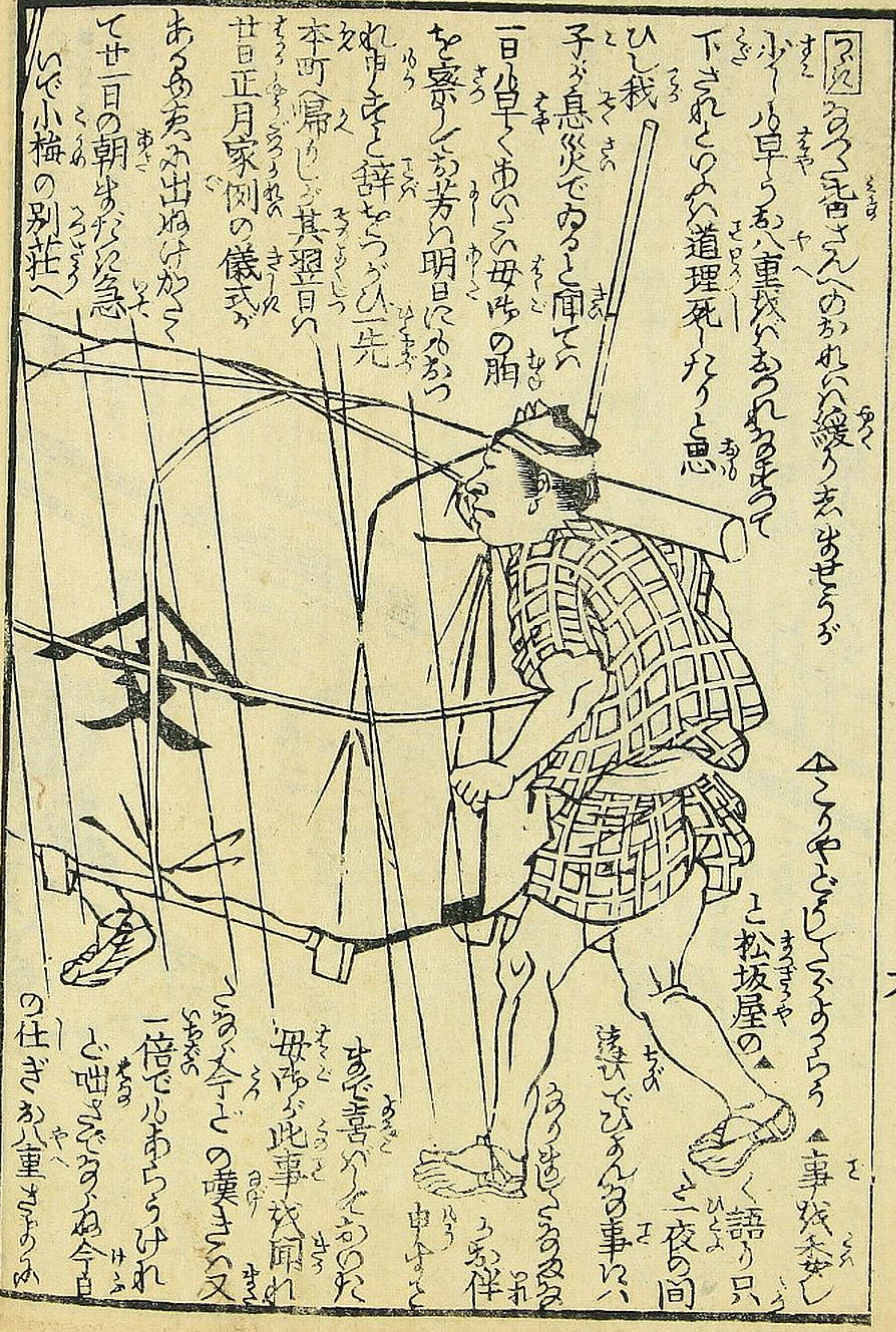
夫れ先立れ一人の娘のお八重
 此世は存らぬ申
 行衛が知れぬ
 此世は存らぬ申
 二人の夫の後世
 残とひお八重
 が家出

深く契り
 事成押
 玉の明日に
 めお伴うらま
 云と聞きて母
 八重と打
 故馬さ始め
 て弥兵衛の不
 始末を知り
 お八重の家出
 をせし無理由
 らずお前が少



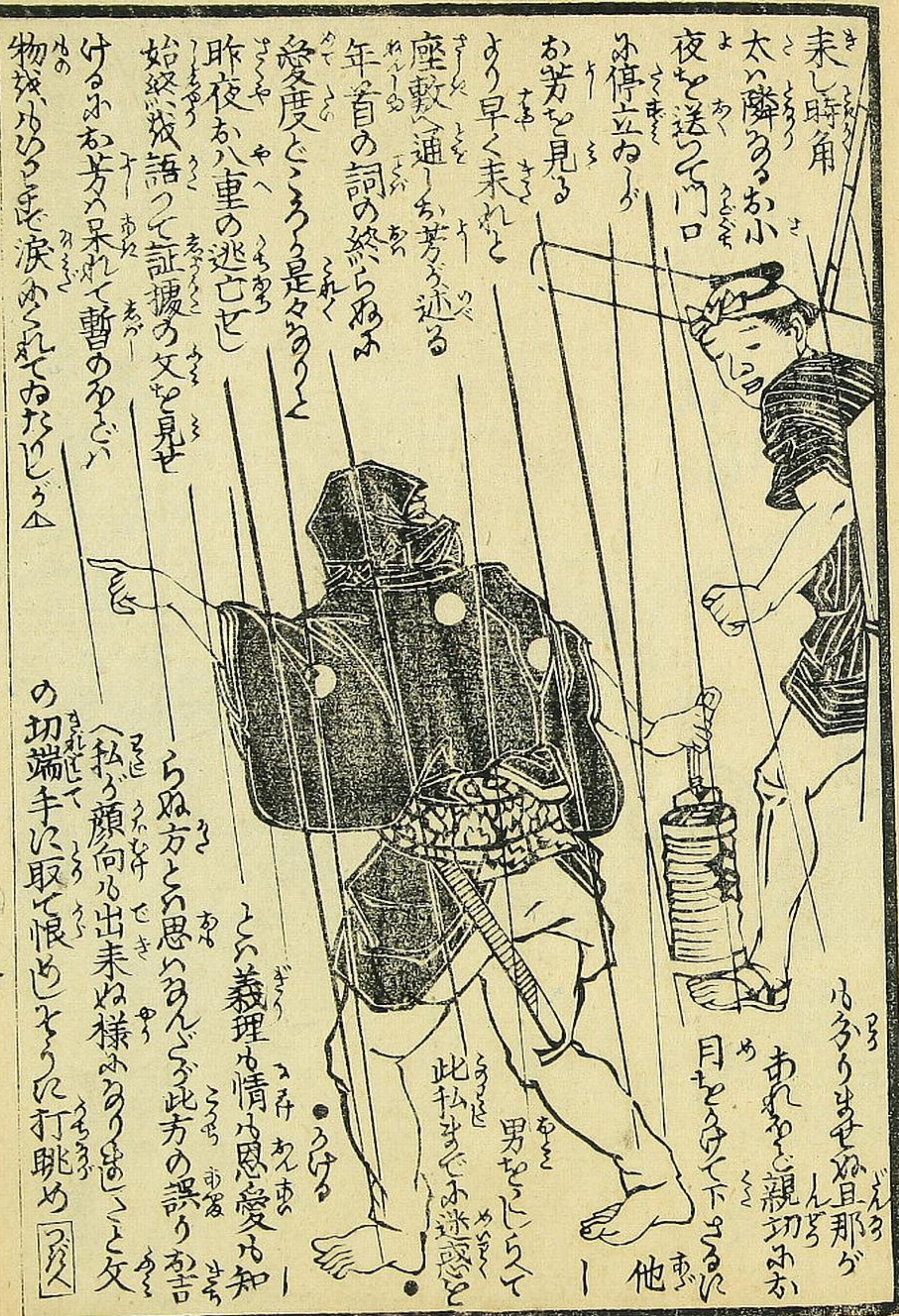
の當日茲命日として此頃の
 念佛三昧のみ其日哉送り
 店の事の手代ませせ
 せしは僅々の内のみひれそ
 出入屋敷の他の得意と
 ありしと聞てまきの毒に思ひ一日
 お芳を尋ね行しお八重の
 母は天を喜ひありしこと尋ね
 てこれらうと由て應るが續きたる
 家の不幸のくち放るるて嘆けい
 老の癖と知りれ共み涙めかせひつ
 お芳はお八重の二伍二什残の語り角太と曰

私の宅お
 わた縁でおま
 の姪のお吉お人
 親切
 仕合せ
 屋の体隠居
 長くお世
 話おつた
 下おれ
 お八重



ついでに毛音さんへのおれは後へまかせよう
 少くも早うお八重様へおつれをせうて
 下されとのみ道理死たうと思
 ひし我
 子が息災でぬると申す
 一日早くおのの母様の胸
 を察しお芳の明日にぬらう
 れ申すと辞せうとひ先
 本町帰れし其翌日の
 廿日正月家例の儀式
 あるおれの出ぬけか
 て廿日の朝もた急
 いで小梅の別荘へ

▲事だまじ
 ▲語り只
 ▲一夜の間
 ▲松坂屋の
 ▲母が此事故聞れ
 ▲倍でらあらけれ
 ▲今この嘆き
 ▲の仕ぎお八重とゆめ



未し時角
 太の隣あるお小
 夜を送つて門口
 小停立ぬが
 お芳を見る
 より早く来れと
 座敷へ通しお芳を述る
 年首の詞の終らぬお
 愛度とこころは是々
 昨夜お八重の逃亡せ
 始終に談語つて証拠の文を見せ
 けるおお芳の呆れて暫のふら
 物残りの涙ぬらぬおたりしう

ゆかりはせぬ且那が
 あれやと親切お
 月をみて下る
 他
 男としらて
 此松までお迷惑
 義理も情も恩愛も知
 らぬ方と思はるんが此方の誤りお言
 へ私顔向ら出来ぬ様ぬりおこと文
 の切端手に取て恨めしう打眺め

是を証據に松坂屋昨夜の始末を咄すより外に仕様のるにあらざる暇を告げてお芳は又も本町へこそ帰り

ぬの田心ひのまに謀りあはせてお重を除きし
此身の願はるるの十の甘くも
透しと玄達を小夜と下部の甚八まで
夫々褒養の金と与へし是れ
先は角太郎と
夫婦はるるん緒口を自身に解く
何とあらまご結しり屋敷の縁を
切て自決にるる事いお小夜

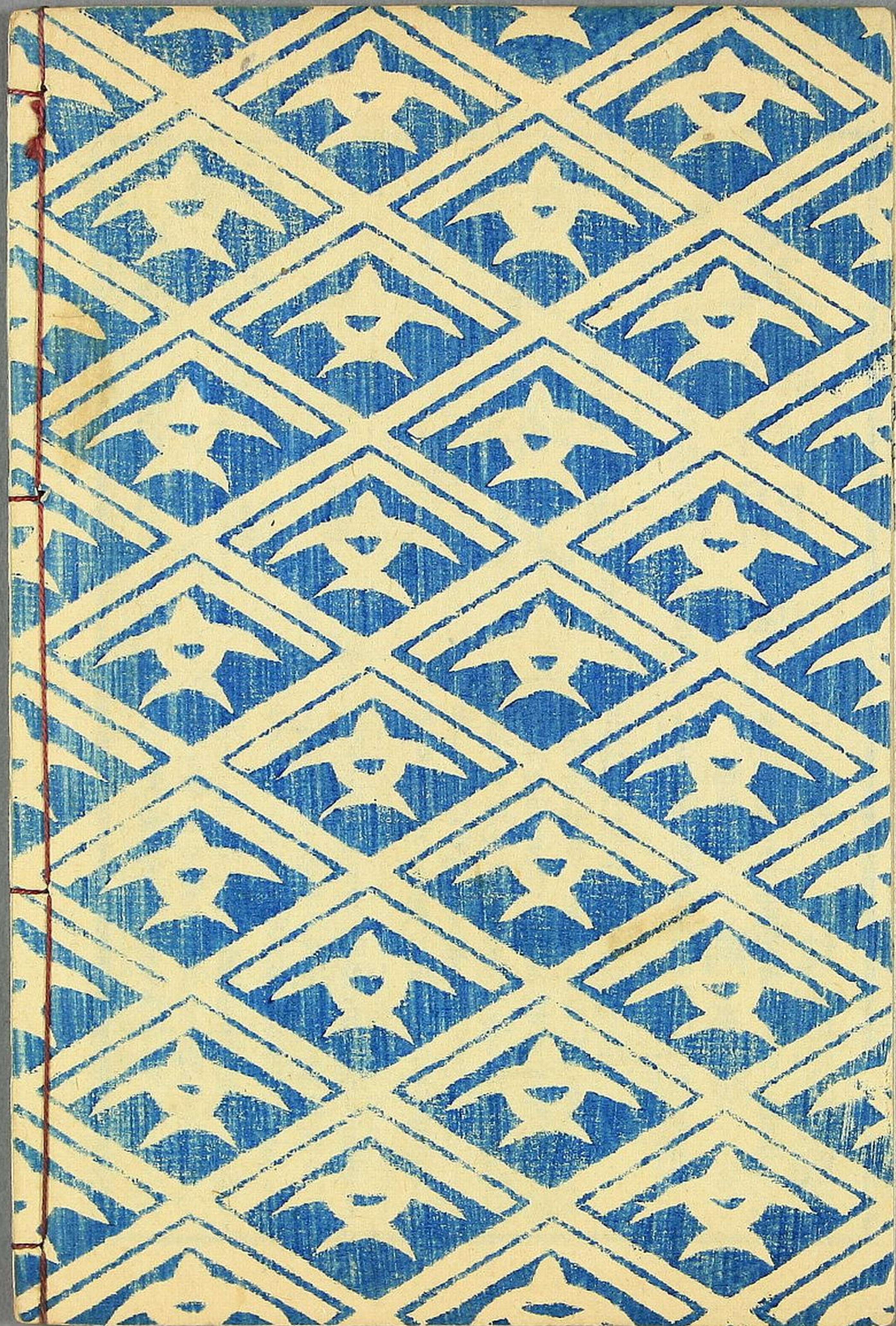


屋敷の首尾を
と他
頼むを
勇治
易く
引受て
車以角
太

さうぞ調

ふくろもあざざれ斯
ゆの時の玄達と思へ彼
家業の都合で此頃半迄の業
店轉宅直て路も隔り其後ハ
一度も来らひばお小夜の氣成らぬ
あれは是れと案ずる内考へ付
角太の甚敵にてちのこく出入
本町の割下水に住む幕府のお坊主
三崎洞院の二男ある勇治郎といふ若者
親洞院が大産家出入にひておきぬお懇意にせし由縁也
あれは此頃角太と共にあきぬの察し音信を幸ひるし或日の
事あきぬの勇治哉一問招き事の大畧打明てお小夜と共に左角太の方と







よあし
かきぬ
まゐの
あまの
め
夜嵐阿衣花廻仇夢
号二

永島孟齋画

二
号



其由を語り早速か
受て其身が汚殿に
あり時の衣服調度の相
應も品をあげあつた
みどりお峯を奉公に
差出一角太郎と
丸打合表向て
婚姻を取結ぶ
吉日と撰び屋敷
へ斯と申上し
ふ祝儀と
して小袖と
の外の品



一角太の夫が証拠をうとて手



賜り此後の屋敷にて
扶助せぬが其手當とそ
餘金の黄金

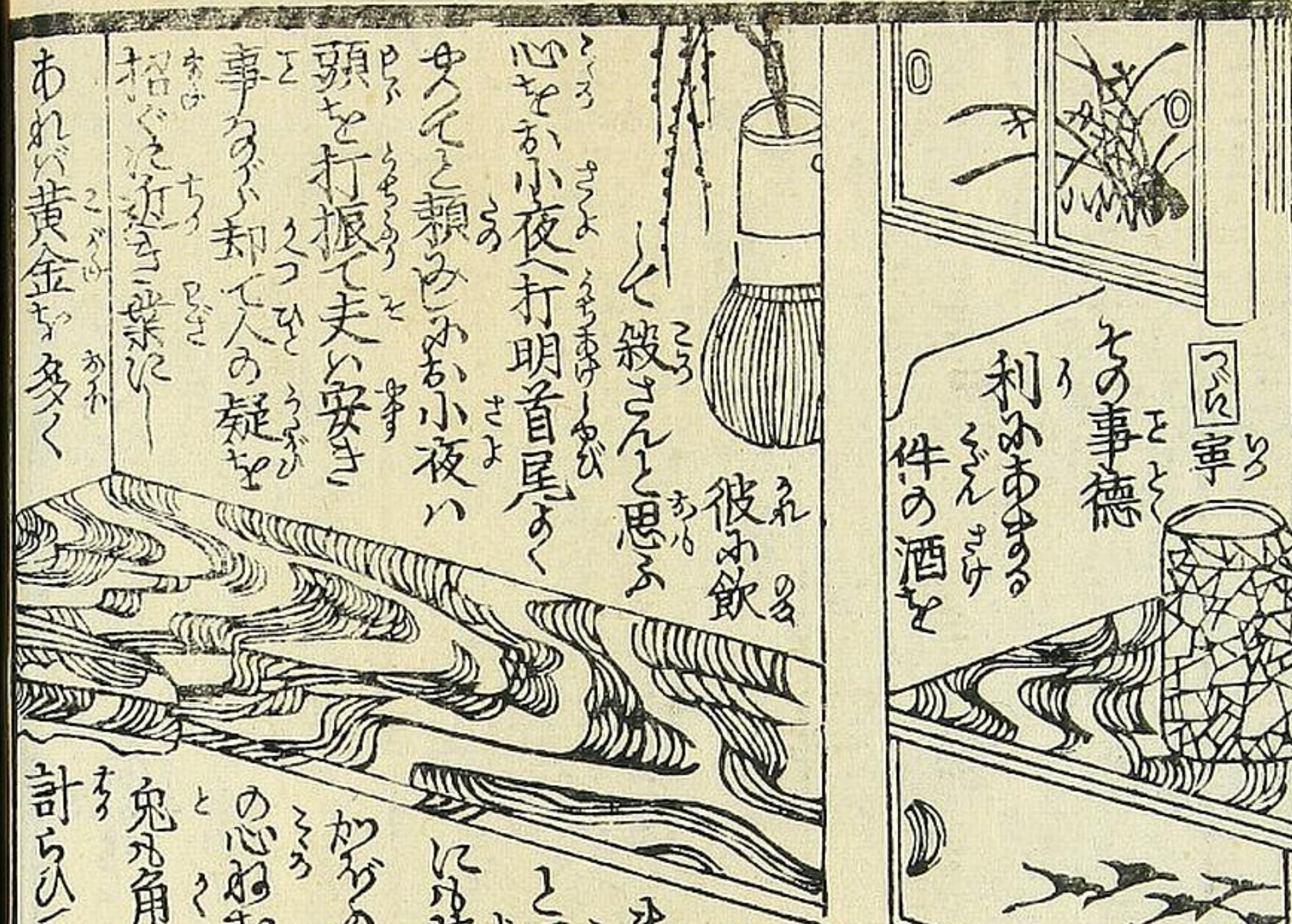
其新の男と逃亡せし様はなると口

跡を殊に怪しみあるこの事おれい
此後角太と夫婦にあり二ツの寮
も一家とある長内
の甚八の手跡が目
にあり夫の事を
知られぬ悪事
の露頭とある
のみある是
もて尽せし辛
苦もあつた
かやせんと思ひ
日は安心なれば

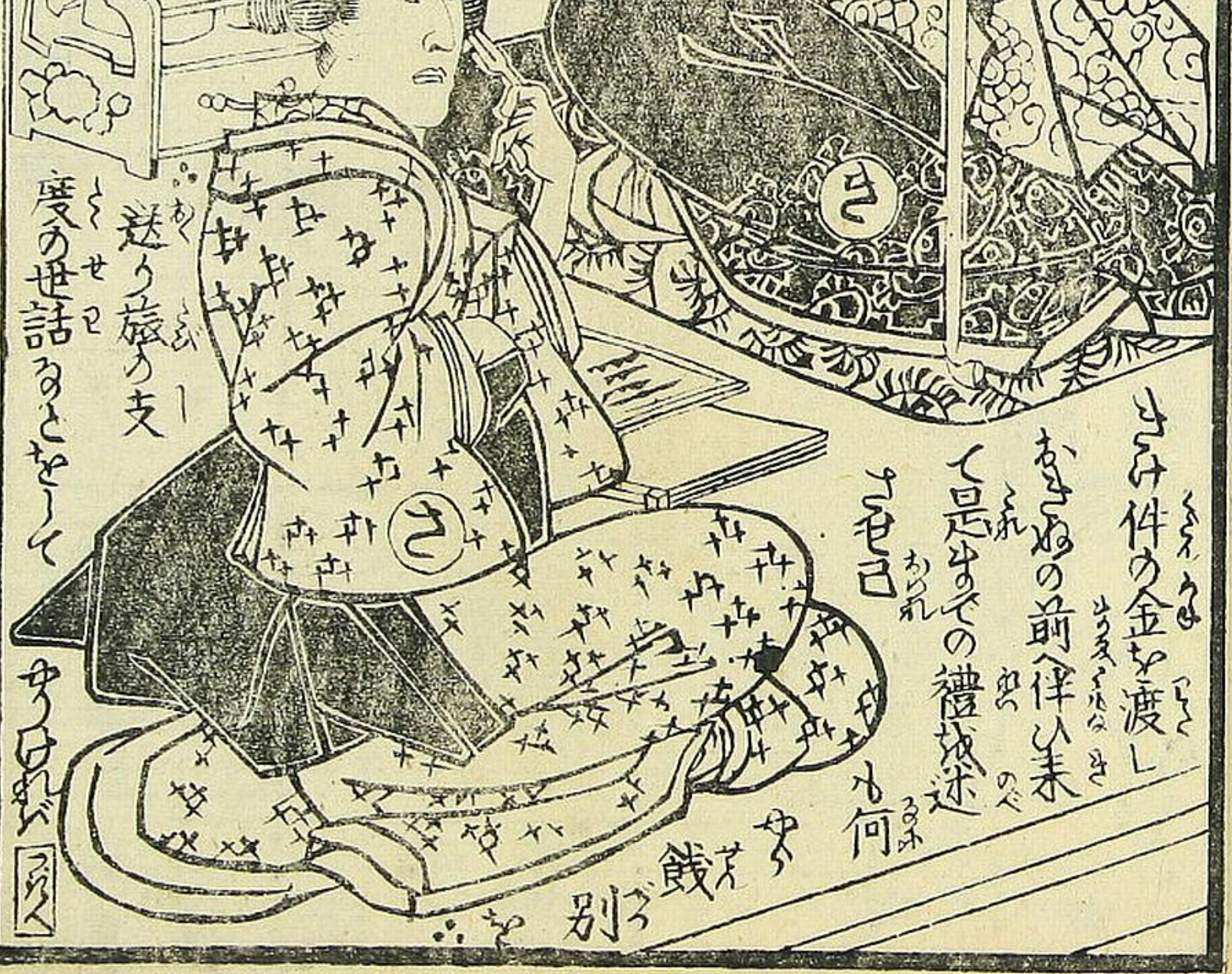
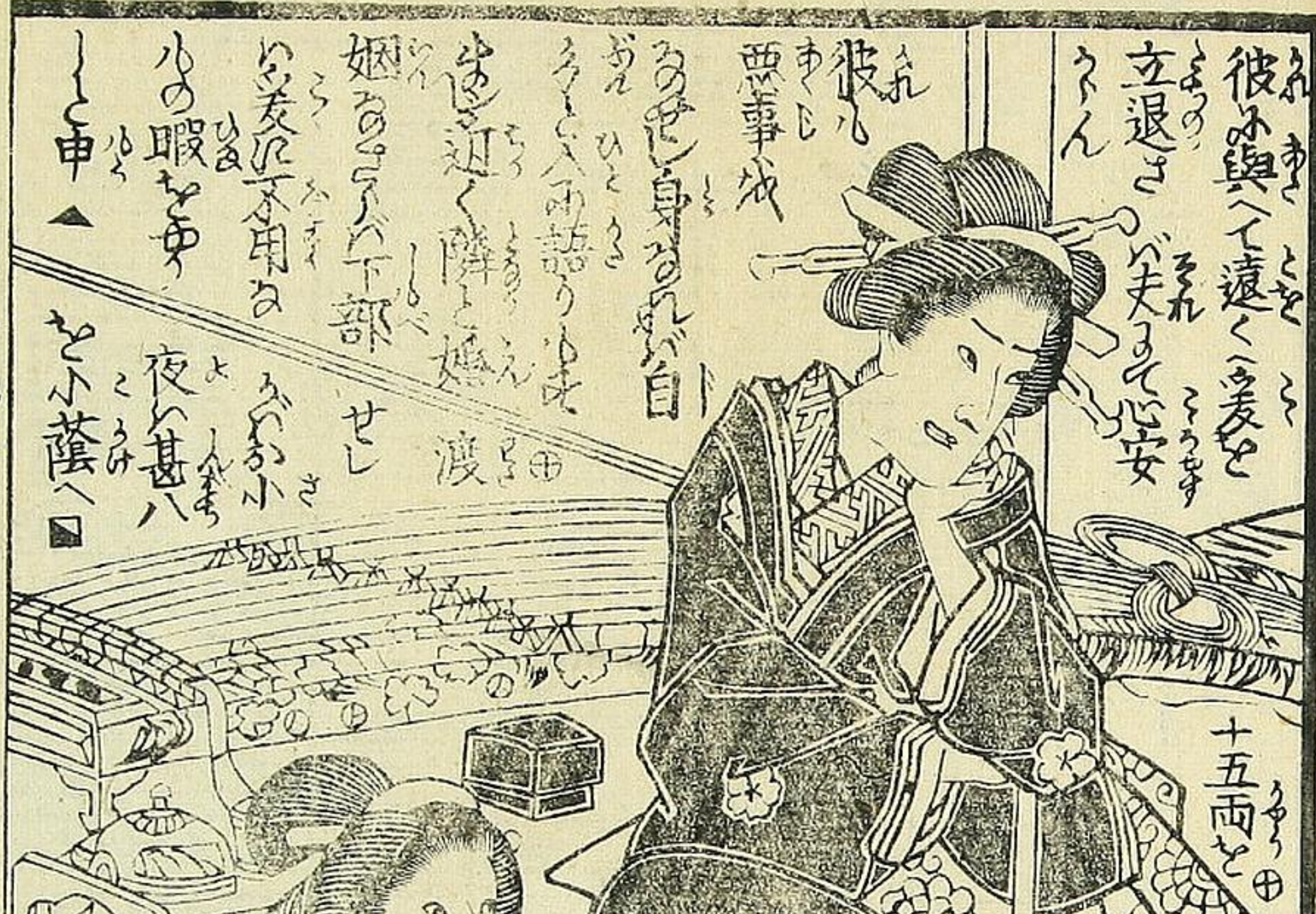
事 事徳 利の酒を 彼の飲

心をお小夜打明首尾すく
申を打振て夫い安き
事あり却て人の疑を
招く近き業に
あれは黄金を多く

太のぬい丸 老と思
何ぞんそ 何ぞんそ
く暖の暇を
下され事取申し
知れぬ角
かぢか小夜
の心お知ぬぢかぢか
計らひこと金二



彼小與へて遠くまで
立退さ 夫の心安
るの身おれが自
多し入話の事
は迎へ隣に嫁
姻ある人下部
い妻に不用な
小の暇を申
申 小蔭へ



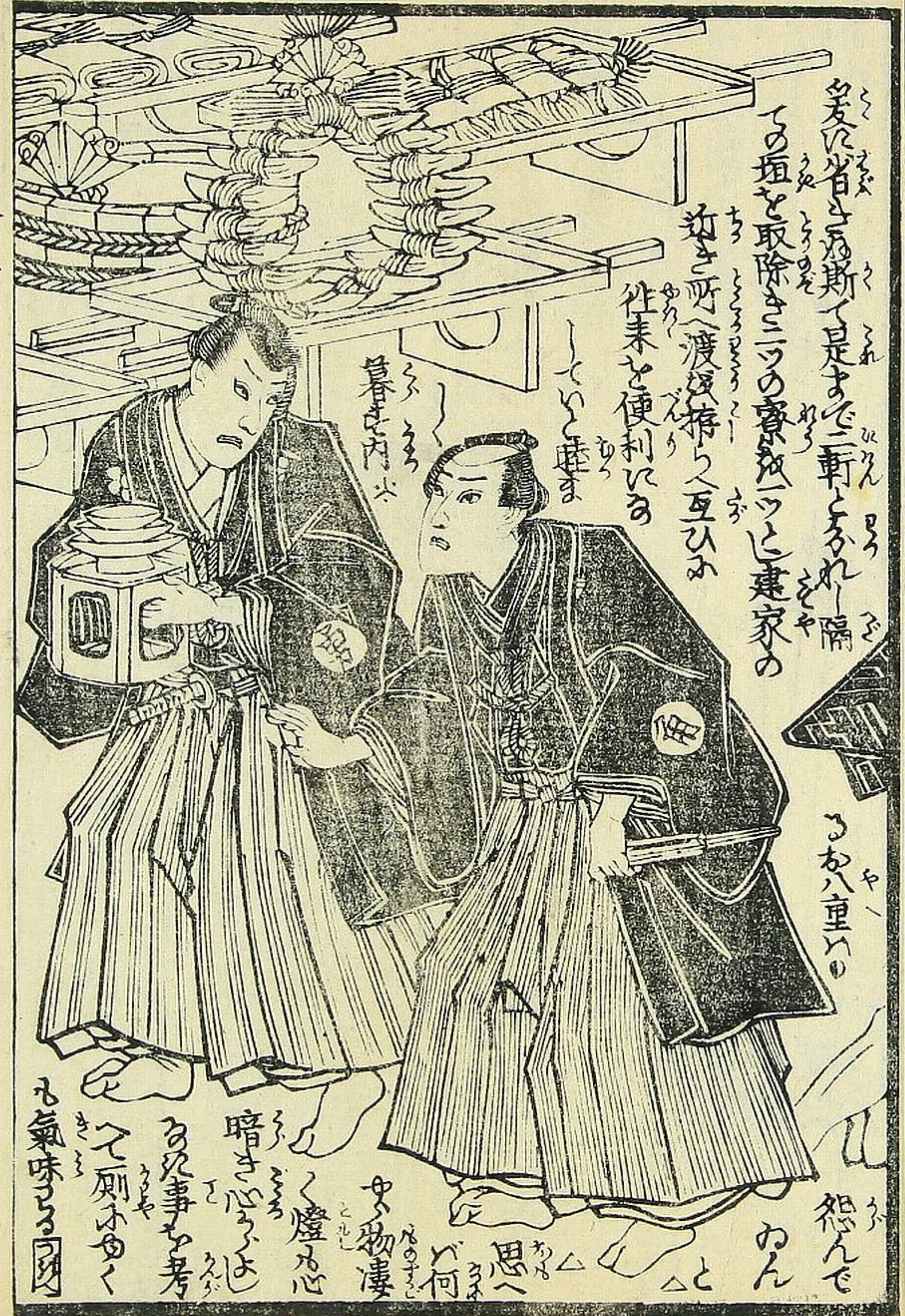


甚ハ打悦び夫
 暇せしげ何野も
 るく出行し小
 ちなぬ最
 早氣にかゝる

雲もそれる角太郎と婚
 禮の當目竹二郎と番頭の四
 郎吉と始め親類の甲し媒人と
 頼は勇次郎が論その外出入の
 人々凡そ三四十人の酒宴にて四海波風
 穂うに三々九度の儀式もまみ何れも
 醉町の上思ひくの藝及しりあつて
 いと暇せし事るじが餘り終雜けけ

火つてるぬ春もまた四月初め
 の短う夜もをぬい角太と漆目の
 夢あつる子真途の鳥赤い
 血たき死

彼毒
 茶
 無
 じ



美の省と斯く是まで二軒とされ隔
 ての垣を取除き二ツの賣奴二ツと建家の
 近き所へ渡渡持り互ひひ
 往来を便利なる
 暮れぬ

さか八重の
 怨んで
 何
 思へ
 物凄
 燈心
 暗き心
 る事考
 へて別小
 氣味



同はけれとあつて思はん毒婦の
 魂性手燭とめて椽傳ひ近き
 顔で用とて手も濡が
 んと椽端の小窓抜明て庭か
 せ何心も眺むれば空の
 一面がけらるる黒白の
 多ぬ直の闇をのぞく雨
 にあとづる浅草寺
 の鐘の音の後夜被報とて物凄く
 外は音も入る魂のまゝあつ
 める燈籠のあつてふ籠まゝ
 夏木立とてより風の枝の
 間に見ゆらけりて人



影と腫をまてて見れはらに暗き闇の夜にありて見ゆ
 か八重の姿色五月の顔の辺り無なる鬢の毛口もいふまゝ
 かりと立てるまゝに眼を逆をもちぬの顔打守り怨也とてうたひまう
 くと此方近する有様に有繋のおもぬ心慄とて人か時んとあせれ
 と小少くも声のうぬの不思議とてかげと躰々自由にあらず是れか八重の
 怨美に取被さるる事あるうと声もあつてか八重せん赦とて
 とと叫びし声に添寝の角太の打發馬とて
 せと振起
 妻みて
 怖る
 語らん
 由心
 氣のつれとれと
 寝衣をひく汗の
 此れめ
 此れめ
 此れめ
 此れめ



胸の内さうも強氣の女さうも其後の夜今猶ほ
 胸へえり海ゆき折々夢にお八重の名のみよぶ事
 あつた不審ぞと角太の思ふおきあつたら其事故
 少くも語り出さぬ何う様子のあつた事と押
 て向ぬと心は今の更にお八重の行衛は深怨ん
 で見つる暮あつた折め
 ふれど語り出す
 咄ちおきあつたら
 小打消し
 身もあつた
 むして厭がる嫉妬さうりの
 様でもあつたら彼の身さうも疑うれ何や心面白

うぬ此頃

霖雨と共に一向に立籠

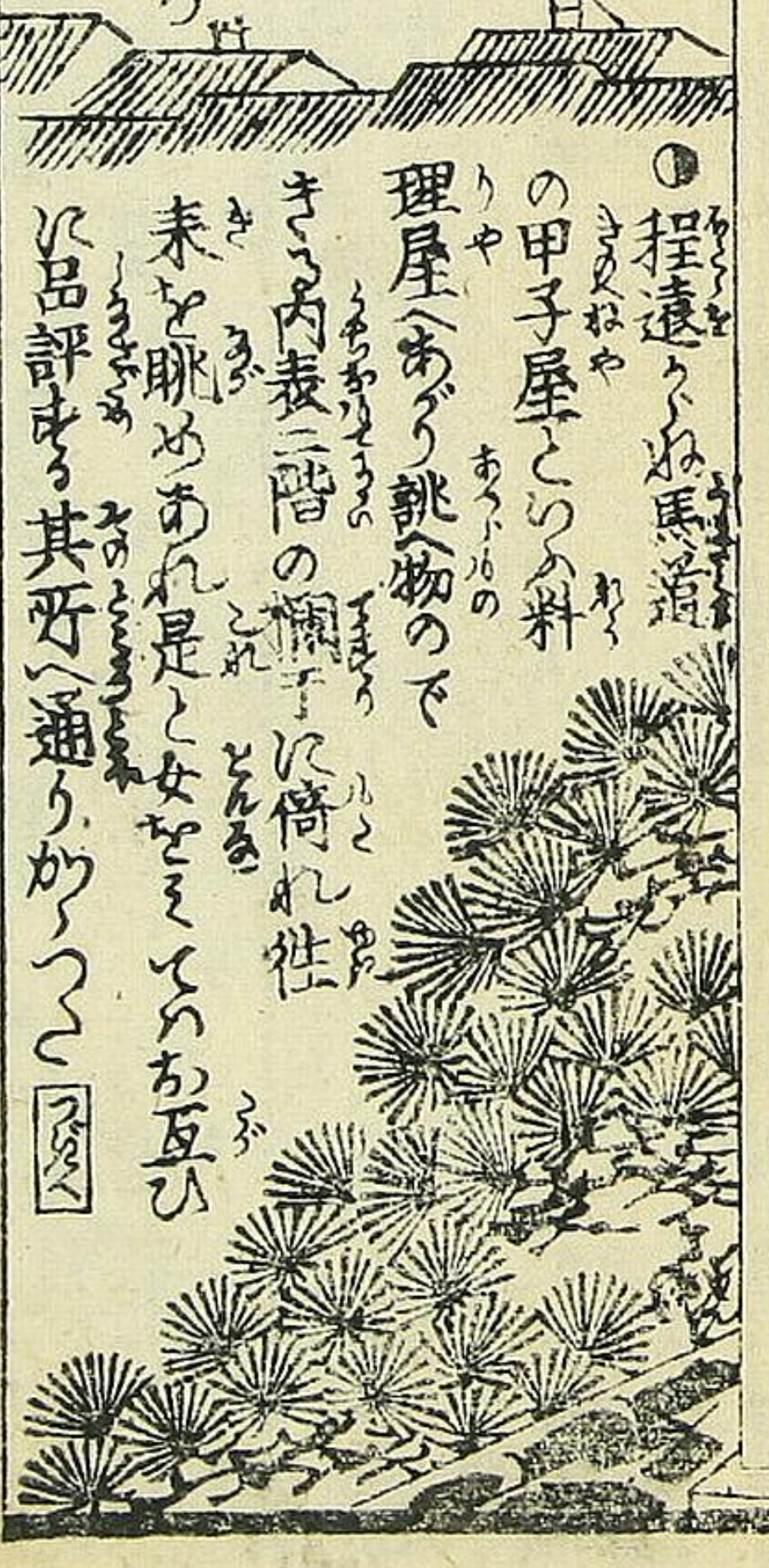
り只掃々と日を送る泉月の

空も今日も久しかり

ある庭のほつちも昼近く

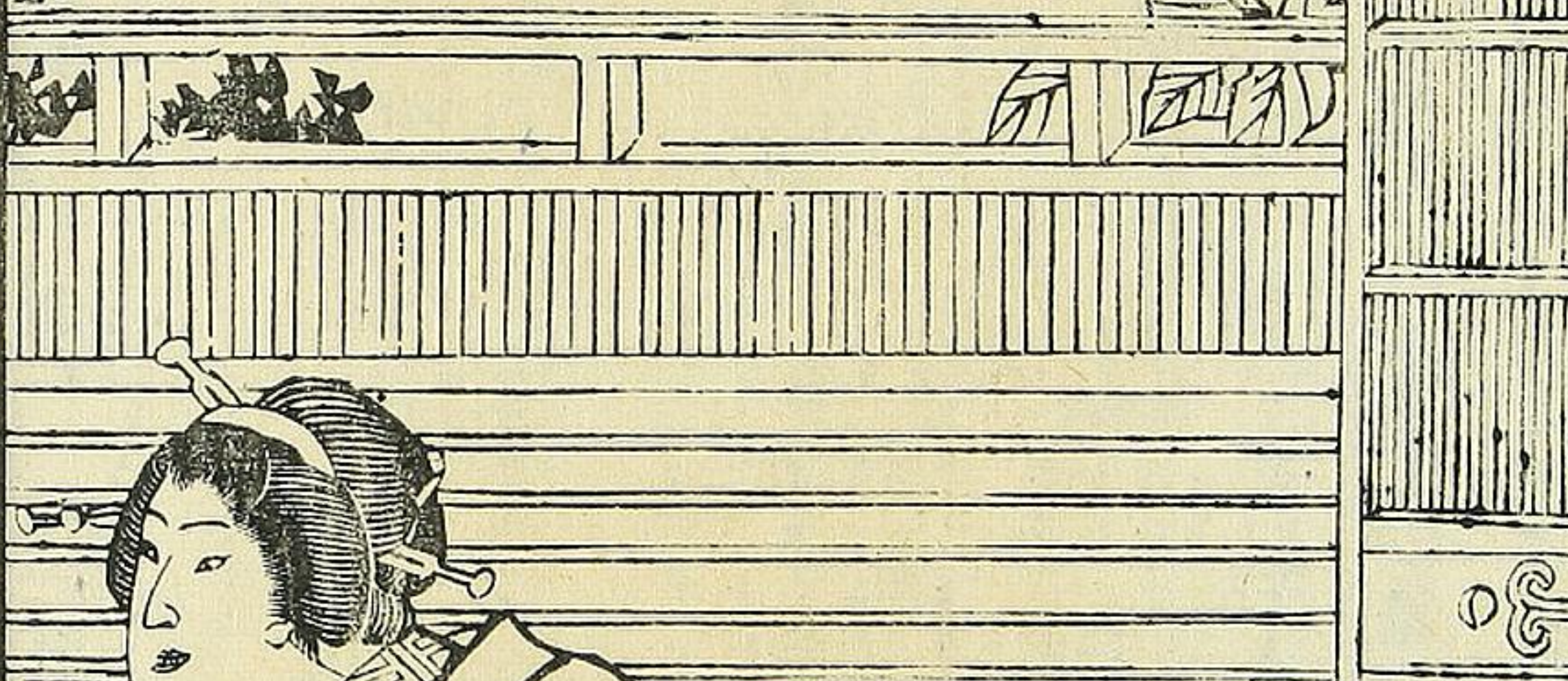
交る友が二三人訪来て誇る幸ひ

夜類と着かお伴立てるがごと
 隅田の堤の風景も所あつた珍
 ちうぬ竹やの渡を向へし
 浅草寺の奥山の花屋敷あつた
 あちこちと眺め歩いて正午ごろ
 支度せんと地内を立ちぬ



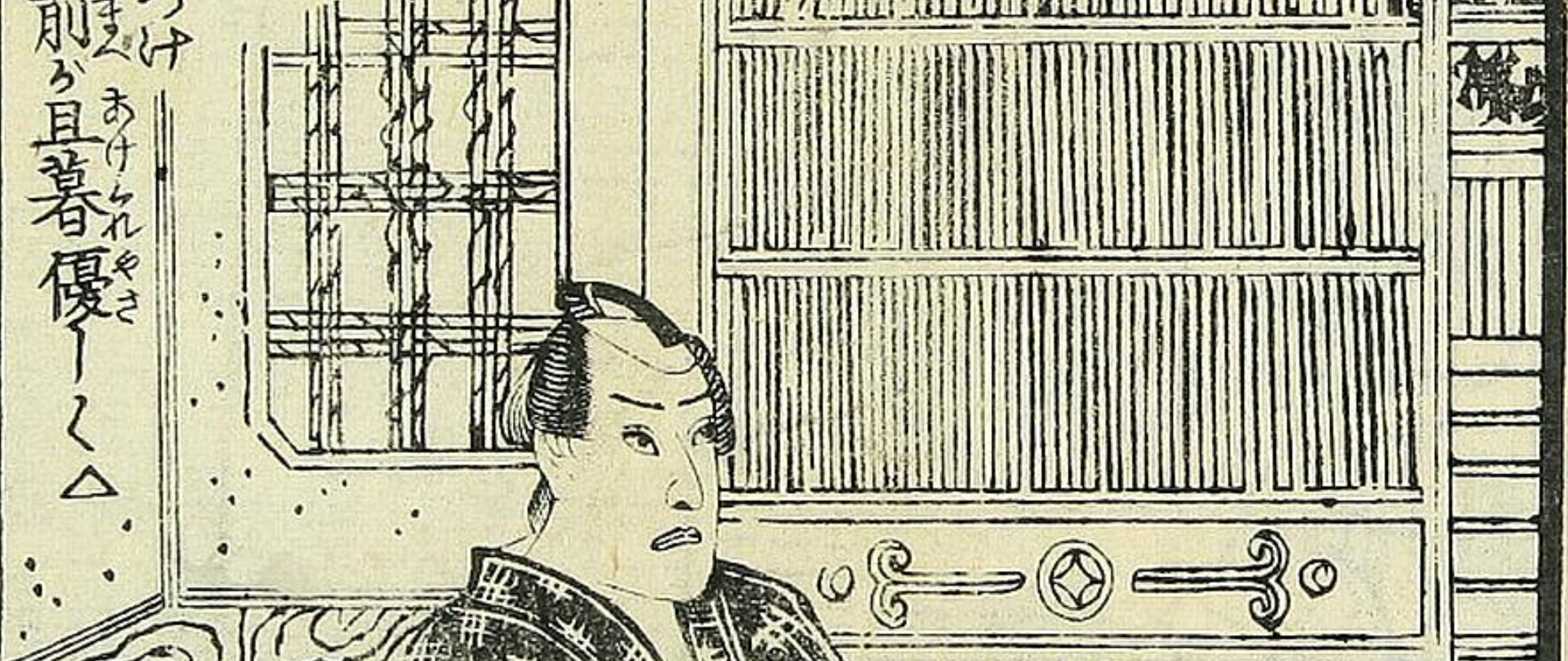
程遠くぬ馬道
 の甲子屋こいの料
 理屋へあつた眺物の下
 きつ内表二階の欄干に倚れ往
 来を眺めあれ是と女をきてのあ互ひ
 に品評する其好へ通りかつて

其日の別れて立
 帰らば妻のまゝに
 此の少くも語らず其
 習ふも浅草辺の料理
 屋へ小久坂招いて世間咄
 しの事成すや其身の
 素性を尋ねた元ハ
 ハ王子在の者にして十二
 の時に入ふ貫つれ育て
 られるる母親が長病
 氣に父親が烟草枝刺む
 営業も藥の代ふ煎り
 つめ管より細き烟と

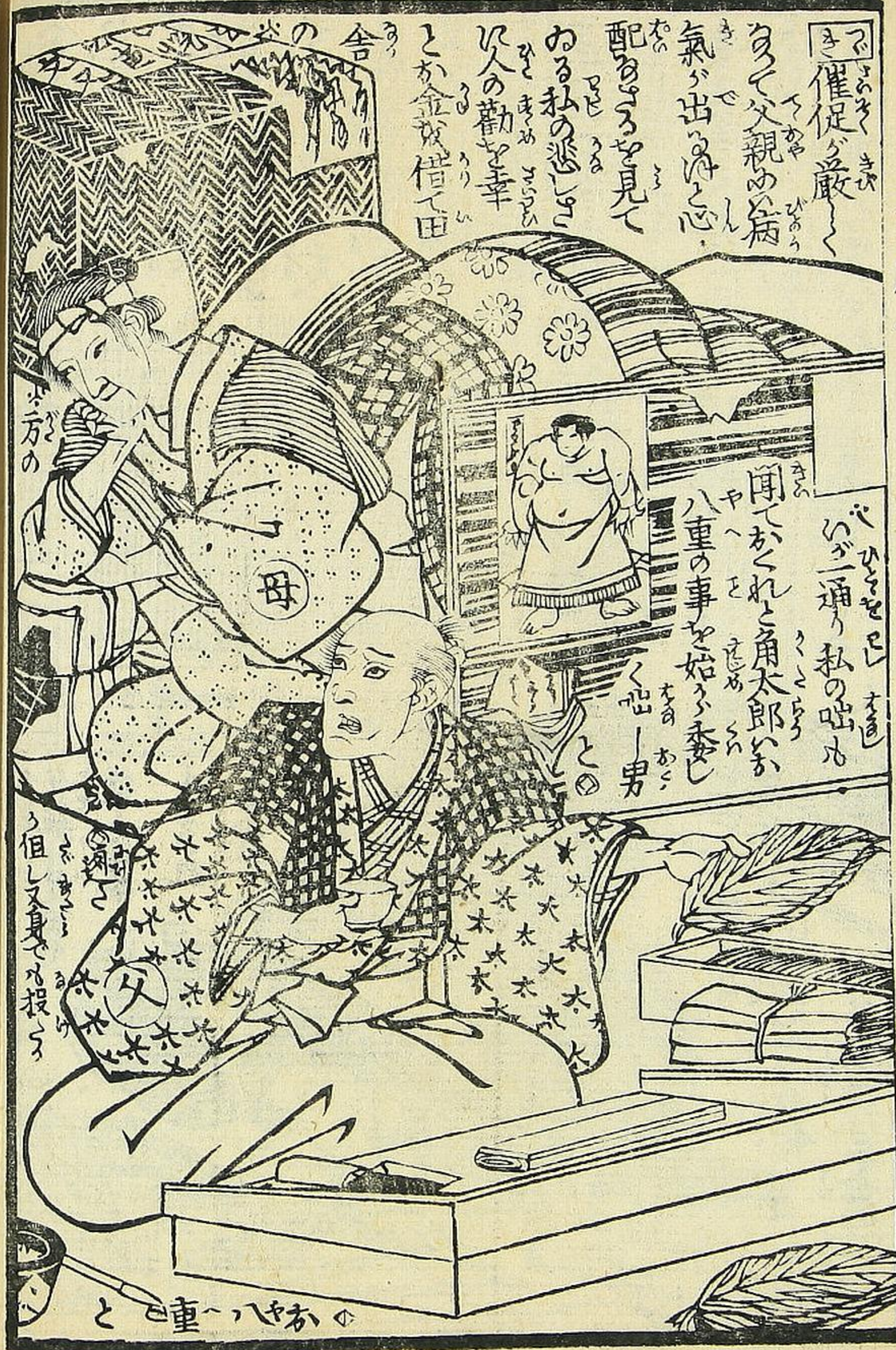


世話をしつゝの
 嬉しむはれ
 氣の毒や
 と夫のみ
 苦み
 去
 父親は是を
 通し仕事
 なるれ
 末次第
 此世は去れ
 後ハカ
 年の暮母が

へ立るぬ辛き世の中
 に生て甲斐あるは老
 の身も十八年の其
 昔中山道の深谷み
 て育てあけたる入
 の悴三吉が家出を
 せし十四の時敷へて
 見れば今年ハ丁度
 三十二血氣盛んの若者
 むれが手元におゝる斯
 まゝに苦しい思ひいせほ
 きに不孝な奴と思ふにつけ
 貫つて育てた他人の前か且暮優しく△



細る身
 代へ和て加へて田舎
 ふれた時借ゝか金の



催促の厳しく

多く父親の病

氣が出る心

配るるを見て

のる私の悲し

人の勸を幸

とが金借して田

いづれも私の咄め

聞ておくれと角太郎

八重の事を始り委し

く拙一男

と

母

父

と

と

と

と

うたげつげ衝々此頃

弘めむて執事とこの

おそゆるが少し習

三味線の其執事

ぶくふたつ不仕合

身

上も熱

と思

と涙

も共

る

生死に更にかつねと

始めはお前

時

思

人の空

似

ふ事

は

顔

う

く

一途

思

人の空

似

ふ事

は

顔

う

く

く

く

破山二公

九

似あるの實に不思議
 別の人も少く思ひ
 ぬれぬ心を推察して他
 人と思ふてゝま
 るなと優
 詞の色
 みせて
 其後志の通
 ひ来る角太の
 情にわたされ
 て男嫌ひの時
 れる小文八類
 う角太成

暮ら互
 以忍打明て深か
 身は生馬と
 亡せ不實
 聞に
 あり事と座く
 あり思へ何所
 無事なる様二月の未
 養父が且暮れ行備
 一
 勿体なけれ何平不實
 心願ひ行つて見んと
 一夜かき

銅版開化玉編 全 開化女用文章全

近世紀聞 初編より 九編迄出板 以下追々発兌 田島象二編輯 高業 小学 取引要文全

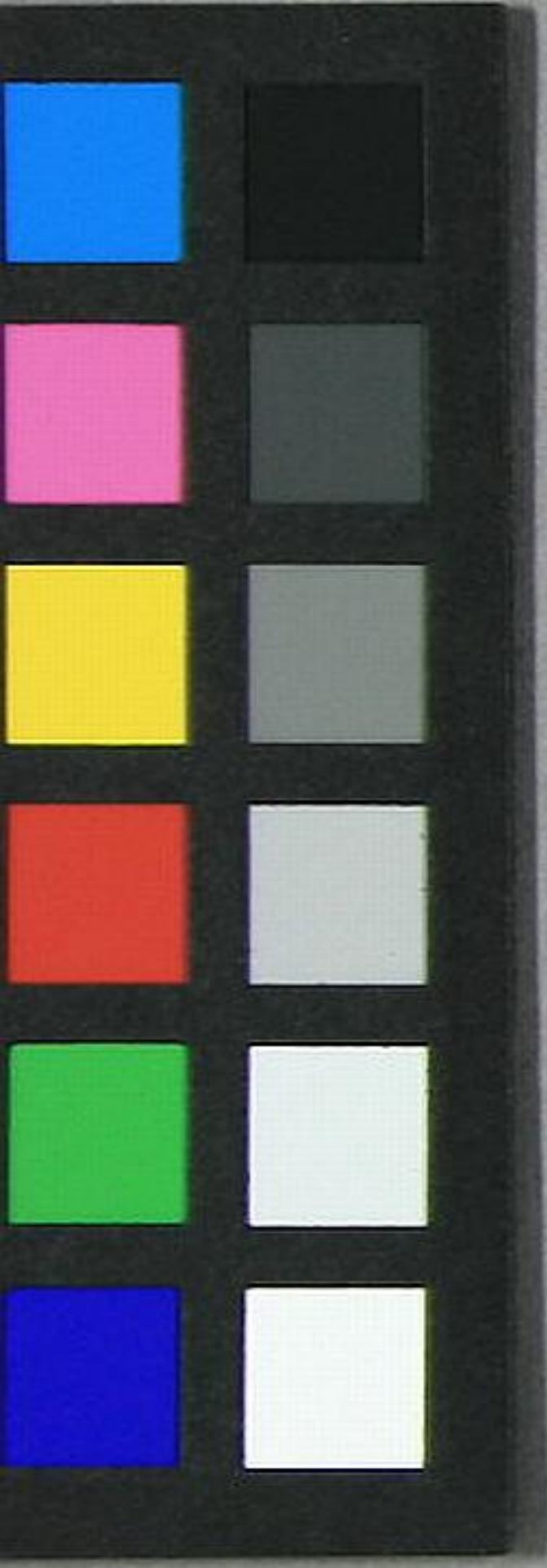
義烈回天百首 全 金花七變化 魯文作 國貞画

東京全圖 全 濡衣女鳴神 秀賀作 國貞画

文 錦繪問屋 出版御届明治十一年六月十八日 第六六區二小區深川富岡門前町六十番地 編輯人 岡本勲 造 第天目十三小區横山町三丁目二番地 出版人 辻岡文助

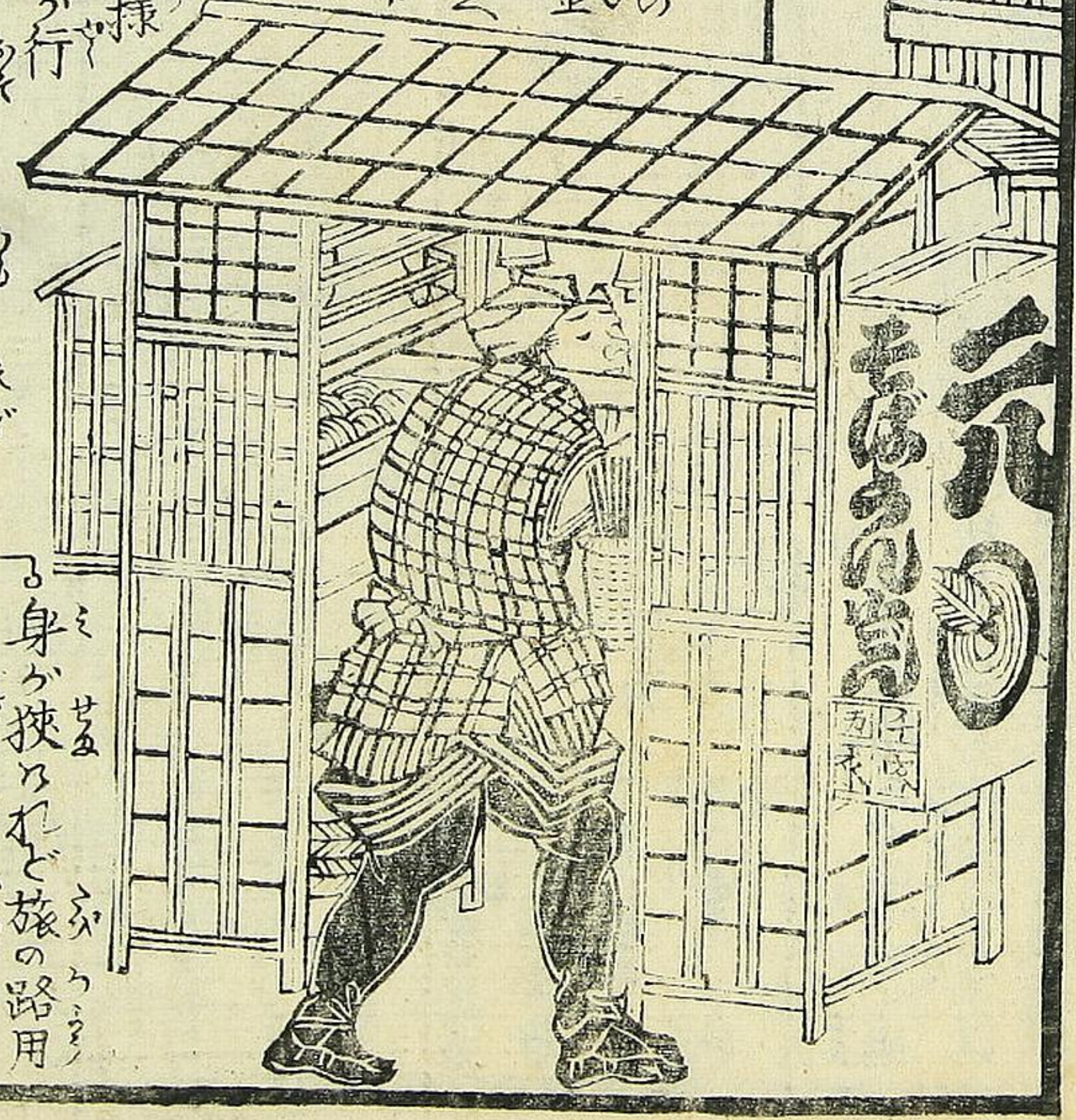
010190508469





○宿まき枝と
 離し羽抜鳥
 貴し金のあまきま
 昨日千住今日吉原小店の
 遊びの敵おとも遣ひ尽せぬ金
 高もあしと夫を取戻し遠く
 ふひく保養とせんと吉原田圃
 の六郷の大部屋へ入り込ん
 甚八が催ふ博奕の大賭場
 で足を出さずと引むれ六は様
 も尽果て呆然とを立出さず行
 べき的もあつく悪事の報は怖りと思ふ江戸め

夜嵐二下



身が狭れば旅の路用
 月夜の夜便と



夜

嵐

阿鬼奴

花

仇

夢

廻

岡本

勘造

綴

金松堂寿梓

二編

下之巻

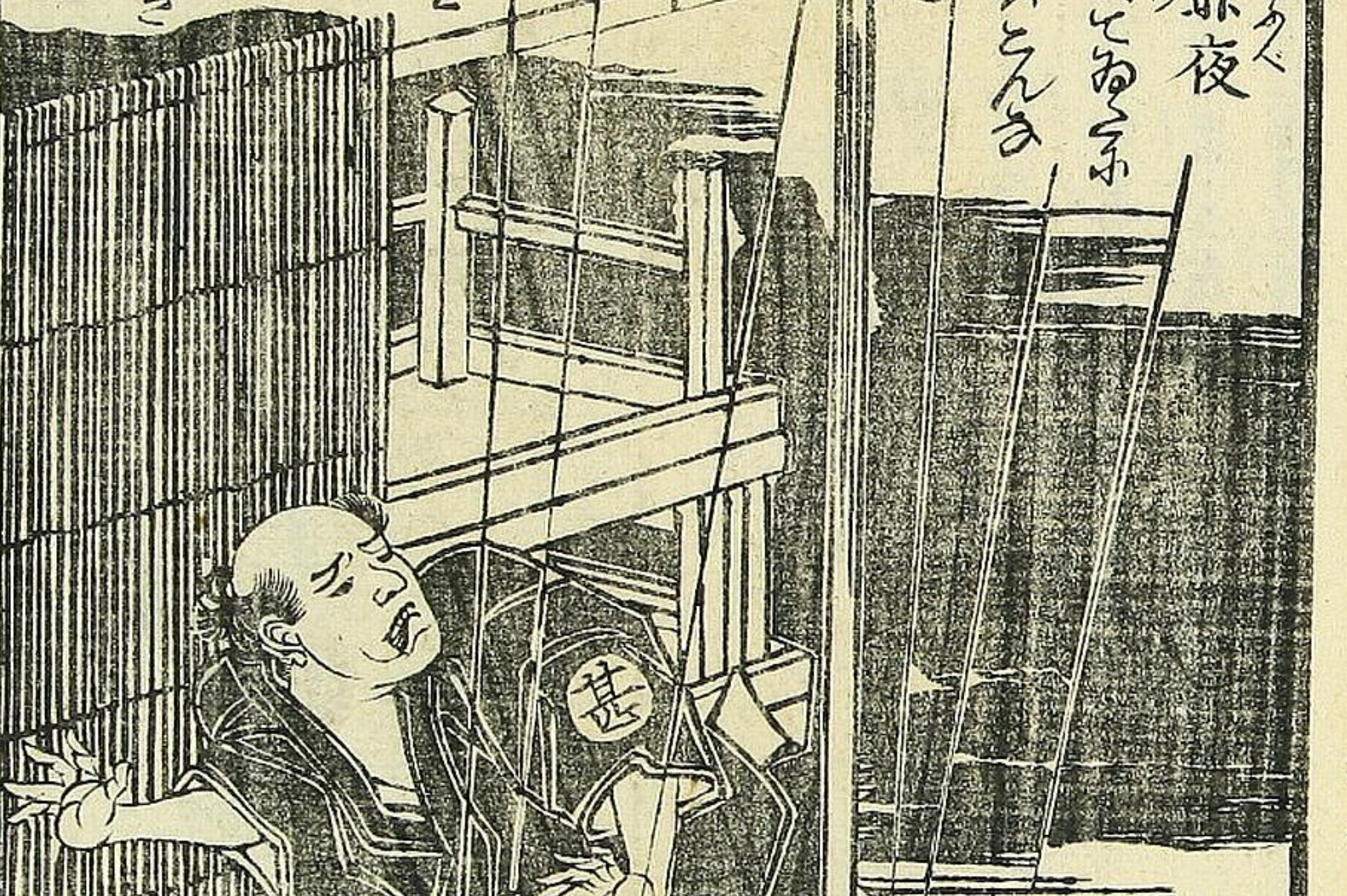
孟齋畫

ついでに女達の
是より行て泣つが
一分や二分の草鞋
銭不のあつらふんと
更行空を眺つ
往來たえらる
浅草の雷
神門「來かろ
時俄ふ空が
撥曇り月も隠
とて風さく起り
物凄くホツくと
雨の少く降



積上てある床几を下し二つ並べ
其上へ寝持びが眠れぬまゝの色々と
返らぬ更を考へて心細さを今更
悔む詮なき更らぐら欲に暗ん
ご一時の誤り人をおめめ手
ふ入と多くの金
一文の此身お着ぬ
今日の仕儀もたぬ
悪事のせぬと
胸の曇りと請
共ふ月を隠せ
村雲のよき晴たる薄明の雨
間なる人足の此真夜半に

出まよ三イ昨夜
あふ傘と持てあふ
間の悪い時といふ
ののこ
四辺
見廻し
辻講釈が
出でぬらる
葎簀小屋を
見付て是か
妙と束げ
ある葎簀買うき
分けぬのこ



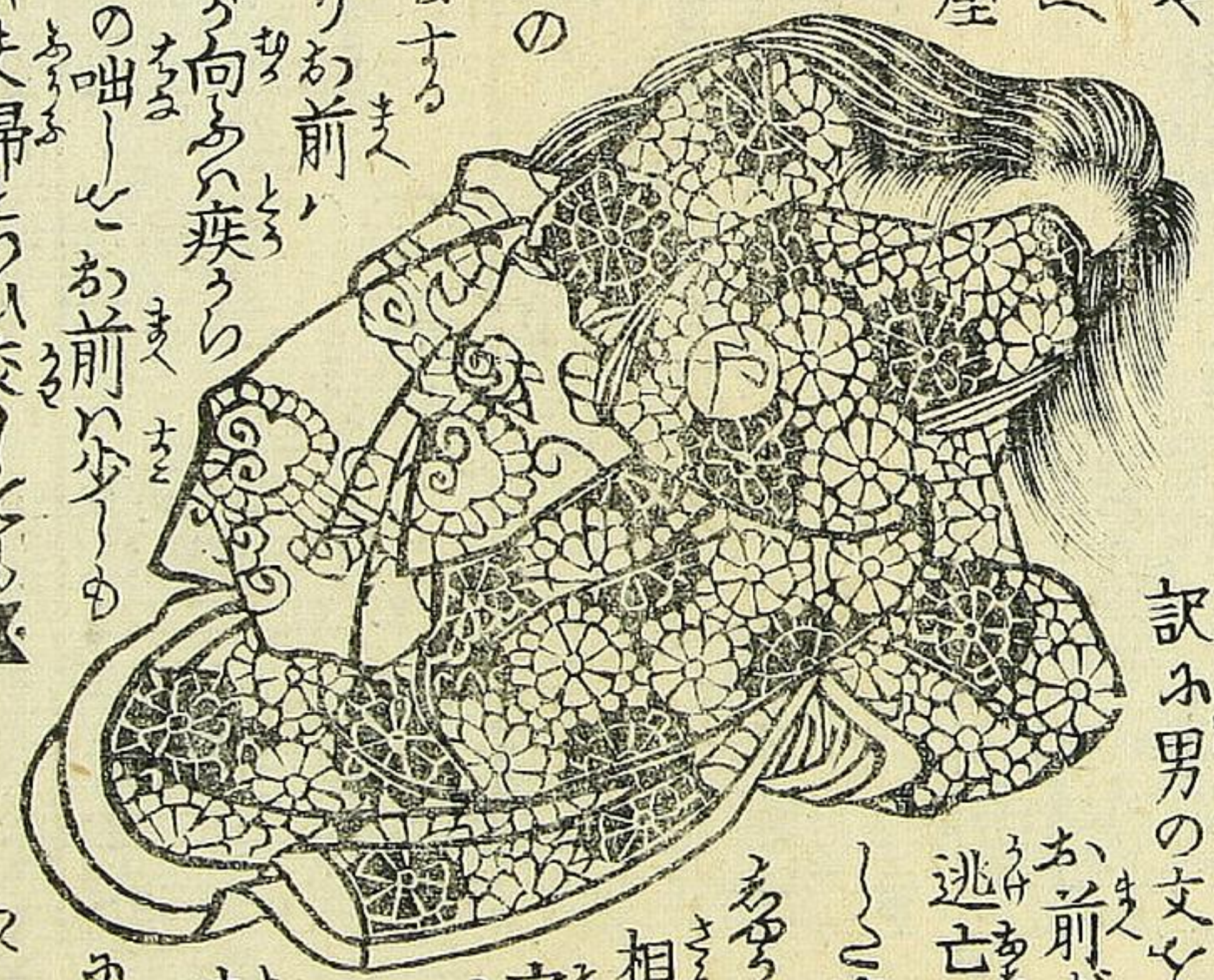
とて此方へ来ぬ何者
と葎簀うぬ分け甚か羨
やう子をみるぞと知ぬ
白齒の一人の娘
夫の髪をとり
乱し裳を
ふちり掲げ
まき素靴
急ぐ
と月
のこ

つゝ光りなき夜に見れば是の如何も縁ふ方ありてお八重の面影
 されば弱きふ付込で怨をせしに來りし
 南無阿彌陀佛と甚八が葎簀
 と撲とかけ合せ息を殺して
 止らぬうわの女の方
 行過て更もあまの
 ホツと一息つゞ
 と考へるに足を
 造りしをうへに幽天
 にていふもあはれとされど
 お八重の違ひものけまの那時誰ふ救はて
 無事で此世ある事う左様しと見え近々



今更お前を突
 出す訳ふらう
 種々三丈を
 揚勺葉種屋の
 且那ふとて醫
 者う余れと自
 由ぞモルと子
 麻酔劑を酒へ
 混てお前飲せ
 夢中おあつ
 その所を甚八
 に擔ぎ出さる
 隅田川とせんと

かきぬの悪事も露顯小及べば玄達とて
 此身まで連累らあはれ知てある是や
 勘弁とせぬあはれぬと元の床几へ
 足踏のし夜風と田ふ葎簀小屋
 あはれ報ひふあは坂へ旅立一夜の
 假枕とて夢を結ひなる
 ○色と慾との二筋道を先へる
 隅田の蝶と道所で浚ふ長唄も其身の
 更らあはれしれコウ強情も大槩よする
 めんど此用くり口をすくしその通るお前
 角太郎一美理と立る積りだらうが向ふ疾う
 秋の空涼しくあつて捨らるるあはれの咄しと
 知まぬが隣のあはれぬ欺されて未の夫婦といひ交し



やうに傍のめこのい
 訳お男の文と拵て
 お前が色と
 逃亡で
 相談と
 密と
 立聞
 時直
 お前



ついでに居たりが此時漸々顔とあが貴郎がお救ひをす
 其御信切へ今更仰る事あると
 ろう存じてどうもすれど
 外へ便りあるの
 たと先のおとつ
 替つてあると此回も
 申し通りお腹の
 兎も三月胤
 先を宿し上り
 又殺されるまど今一度
 角太郎さんにお目おろすと只一下言
 申しつゝ貴郎のお心お従ひます
 猶此上の御慈悲おぼろぞ



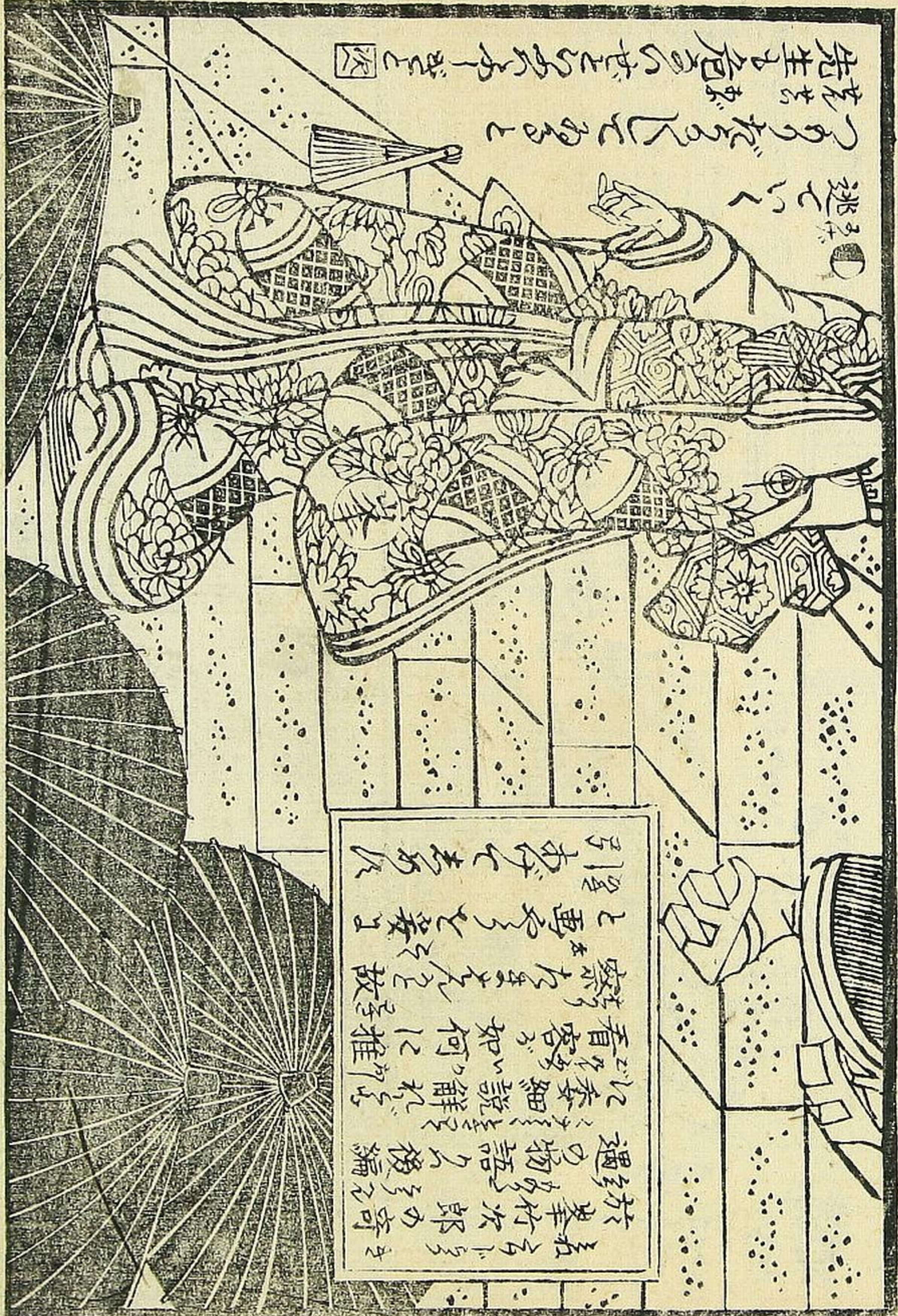
内證で貴郎の
 角太郎さんと交へ
 呼んで下さるは何と
 仰る事も夫まど
 アイとの返事が出来ま
 せんお免しおされて下
 されといふもさう
 玄達が
 甚
 折ぬ堅固な操
 有繋の玄達もあ
 果
 暫く呆きてある折
 誰やら表小案内を
 小お驚き慌てお八重を引立て元のさ
 威嚇し賺し口説
 押込お羽織引り出す
 表の障子を押明て
 そつとの妻で知
 先生
 お宅に
 穢足と手ぬぐひ
 次

黒林玄達



此女は娘の部下甚八が
 隠れ小僧の何妻の取敢
 其用之尋ねる甚八は
 眺め今度望屋角太郎が
 此下男は不用小僧の
 次等と遊ぶと女達は八重
 角太郎の加ふ不突之知
 態と大きな声心問ふと
 押入に聞直し夫の心は
 不便な心と云ふ甚八は消
 せん死な生てゐるを
 一件が露頭と云ふ己の
 大坂の柏原の野へ

於此竹次郎の奇
 遇の物語の後編
 に委細説解は
 看客が如何に推察
 察たまはれん故
 と画とて安ん
 引おけと云ふ以



先生も危ない世のあつて
 逃げ

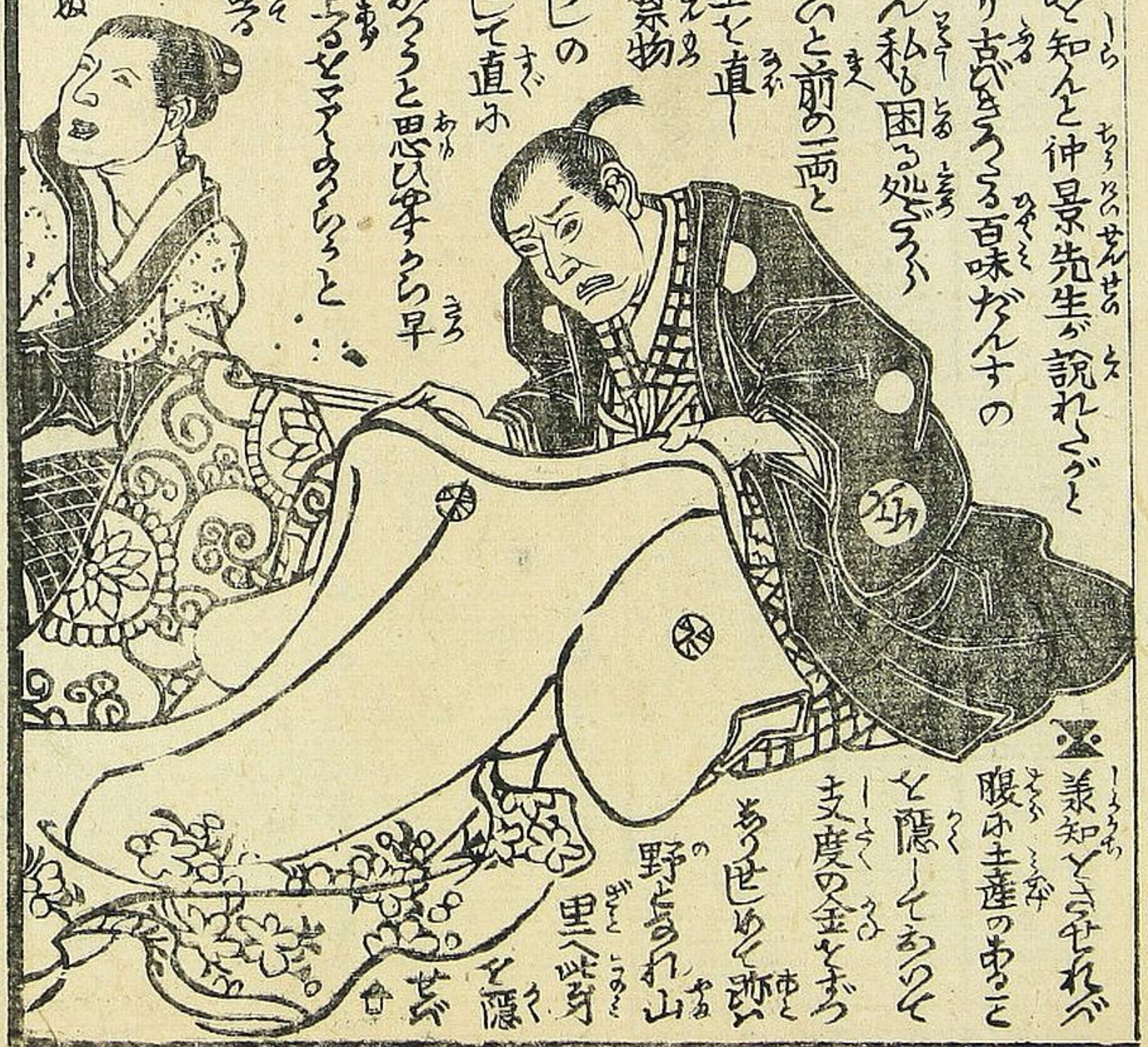


ふあふあ
 まつり合
 内うちでふ事ことと聞きのと憚たへりとあつた
 胸むねの浮んど甚し八はち急いそぶ金ころ一ユ夫よ
 先生せんせいわり 那あの一いつ件けんのいふまのが
 久ひさの間がくくとあらわる
 ので少すこしとあらわる金かね
 残のこり取られてもあまりと立たつ
 出来できねくり上方かた行ゆく思ひ立て

合あひの鼻はな紙かみ
 代かのつり
 だせ
 路ろ用よう
 ちち仕し方かた
 ねね入い

友とも達たちと歩ありて草くさ鞋せ銭せんの勸化けと思ふ半分ぶん
 も集あらわるくく據ころはユ出るひく来るのもあらわるく
 向むかへ行き着きて路ろ用ようと用よう達たちで貫くわんふと思おもつてて
 先生せんせいどうも助すけけて下くだせさる路用ようと云いふ出来き
 ろのいふ銭せん別べつと上うやと甚し八はちと早はやく追お返かえしなさら
 一分いちぶ銀ぎんと四よ紙しのせで差さ出ですと甚し八はち横よこ目めで
 ろのいふ再またアあ志しだらのいふ出来きすめ十じ里りと二に
 里りの所をあらわる二西せいや二に西せいでの木き賃ちん宿しゆくへも 閑かんうの云いふもいふといふヤかららわるの
 泊とねへくく煙えん草そうのめらし空くうをむのておおくさ
 様やう子すの何う一物ものの胸むねのありとい思へ共弱じやくとと
 世よと玄げん達たちが小こ膝かとすすめ甚八はちとん
 お前まへは是こが不ふ足そくといふのうア上う方かたへく のの知しらぬまねへ一体たいあれの何といふ毒菜どくさいといふ
 路ろ用ようの不足そくといふ何も路ろ用ようといふの上うののいふといふ毒菜どくさいといふ一函いっほんの函

妙所草根何ぞ大鵬の志一と知んと仲景先生が説れどごと
 其場と紛ら眉とひそめて空より高きうらる百味だんすの
 引出ら金子五両と取出て甚八どん私も困ら処らう
 是はけり出来ぬから我慢あまらんと前の二両と
 二所はて差出せぬぞ甚八急め坐て直
 先生是は毒の毒オツ毒の毒禁物
 送つて下せ大坂へ行着ア二面とて直
 速にお暇とあせせらと礼はて文よるやアアアアアアア
 つて留ても心め早く帰れとせせせ
 悪更強きと達もか八重の悪破
 思ふ心の弱さ取り取るにふふ



兼知よせれが
 腹小主産のあこ
 と隠しとあつて
 支度の金とあ
 ちせめく
 野ざれ山
 里へ芽
 と隠

甚ハ金六両と荷られてどわわら
 のとらば若や八重の甚ハの咄
 せまのうとあさしと探ぬは何おも
 知ぬそあつぬ先ん安心せ
 のの口説け落ぬ強情小今の色気せ
 打まてと然ととんぞとれ共媚妓小
 主買とのかここと中々承知のあつすまの
 何なると夫のあつとらとまわ
 んの中へ聞込
 此頃赤坂の
 松井の郎で
 妾と二人さ
 すまの



其玉次第で支度の
 金望まの任とら
 丁故番夫へとあ込
 やうとあへと欺
 心あつしと
 獨り笑つて早速
 小松井の郎へ
 葛と求めとの様
 子と探りし噂の
 違ひはト七八の別品
 ゆて従順なるお妾
 と意の探索さ
 とらめあがてうと
 うらつて少く運が
 直

夫のち八重種と辞と師つて松井の郎へ妻の上れを勸めし始めの巻もせがりが何れひり
 ちへん打笑を貴郎の爲とあるらる命と救つて下せつてお礼の意の脊をまきぬる次小計ひ去
 れを存外へみなく諾ふといわらじと去達直は夫々お合せの郎の百も早くめええり上ると
 急るれば又のちもものらるぬ内と俄に支度を取つて夜類の二時指料下す小合せと
 二月餘りつらねあつたあつたの髪とあびせんと雇婆を小云付上る
 髪結と探して走りせ自分隣り鏡をみるげの外と借つて
 あまの支度とせむる処へ渡り二所は伴戻り女髪結を建松が
 妹で久しの間病をいせりと放定め髪もつてかんが
 明日は股伴てつものせとくお前と物にあらん
 品も高島田の結て下さる奥のまはつて
 ころころあつてあるとのふよ任せと髪結をあまの
 明て内小入るの鏡を写すもつてあまの
 振返るる其顔とる髪結とつて
 互ひ小是と顔と合せ遠くつて



橋島輝編
銅版開化玉編全
 島田豊三郎編
開化女用文章全

漆寄延房編輯
近世紀聞
 初編より
 九編迄出版
 以下追々発売
 田島象二編輯
取引要文全

鮮齋永濯画
義烈回天百首全
 魯文作
 國貞画

西野古海編輯
東京全圖全
 秀賀作
 國貞画

灸問屋
 地本錦繪
 出版者 明治十一年六月十八日 第六六區二小區深川富岡門前町六十二番地
 編輯人 岡本勤造
 第天阜十示四横山町三丁目二番地
 出版人 辻岡文助



夜風 よあぜ

阿 あ

鬼 ま

花 えな

奴 ぬ

廼 の

仇 あ

夢 ゆめ

芳川俊雄 閱

岡本勘造 綴

永島孟齋 画

貳号

金松堂

壽

梓



65

60

55